1940年札幌冬季オリンピックの悲劇
―IOCとFISとの抗争の犠牲者として―

中　村　哲　夫

要旨：IOC（国際オリンピック委員会）は，1938年３月にカイロで開催の年次総会において，1940年開催の札幌冬季オリンピックからのスキー競技の排除を決定した．なぜ，IOCはこのような決定を行ったのか．本研究の目的は，この経緯を明らかにすることである．

１．1940年冬季オリンピック大会の開催地として札幌市が決定されたのは，1937年のIOCワルシャワ総会である．しかし，それ以前に，FIS（国際スキー連盟）とISU(国際スケート連盟）は，IOCと冬季オリンピックの開催について議論していた．論点については，FISはアマチュア資格，ISUは遠隔地日本での開催をめぐってである．

２．議論が収束しなかったのは，アマチュア資格をめぐるIOCとFISとの論争である．指導の対価として報酬を受け取るスキー指導者は，オリンピックに出場できるかどうかという問題である．この論争は1935年から1938年まで続いたが決着できず，IOCは冬季大会からスキー競技を外したのである．

３．IOCカイロ総会では，1940年の夏季東京オリンピックを含め，日中戦争下における日本でのオリンピック大会開催につき疑義が生じたが，夏季東京及び冬季札幌の両大会の開催は承認された．しかし，1938年７月15日の閣議でオリンピックの中止が決まり，両大会は幻に終わったのである．

キーワード：1940年札幌冬季オリンピック，国際オリンピック委員会，国際スキー連盟，アマチュア資格

１．はじめに

1938年３月にカイロで開催されたIOC（国際オリンピック委員会）の年次総会において，冬季オリンピックに関する議論が展開された．総会ではオリンピックに関わるさまざまな事項について議論されたが，３月13日午前と３日後の16日午前の会議で二度にわたり２年後の1940年に開催予定の冬季大会が議題として取り上げられた．議事録によれば，３月13日の最初の議論で，一ヶ月前の２月にあったFIS（国際スキー連盟）の会議によって生じた問題を議論し，議長から以下の３つの議決案が示され，その表決は後日の会議で行うことが示された[1)]．

（１）IOCは冬季オリンピック大会を取り止める．
（２）IOCは冬季オリンピック大会を継続させるが，1940年の大会は開催しない．
（３）IOCは第５回冬季オリンピック大会は開催するが，どのようなかたちであろうともスキー競技は実施しない．

そして，２回目の３月16日の議論において，IOCは上記（3），すなわちスキー競技を実施しない冬季オリンピック大会の開催を決めたのである．第５回冬季オリンピック大会とは，1940年２月３日開会が予定されていた札幌冬季オリンピック大会のことである．

なぜこのような決定がなされたのか，本研究ではその経緯を追っていきたい．焦点になるのが，議事録にもあるように，IOCとFISとの関係であり，具体的には指導の対価として報酬を受け取るスキー指導者を，アマチュア競技者と認めるのかどうかというアマチュアリズムをめぐる問題である．と同時に，スキー競技の国際大会をめぐってのIOCとFISのヘゲモニー争いであった．

周知のように，1940年の札幌冬季オリンピック大会は，夏季の東京大会とともに，1937年７月に起こった盧溝橋事件を契機に始まった日中戦争の長期化により，1938年７月15日の閣議において中止となり開催されてはいない．札幌返上後，同大会の開催地はサンモリッツ（スイス）に，そしてその後ガルミッシュ－パルテンキルヘン（ドイツ）に移ったが，1939年９月に勃発した第二次世界大戦のために中止となり，1940年のオリンピック大会は冬季夏季ともに開催されなかったのである．

ところで，IOC 自らが編集した３巻からなる「国際オリンピック委員会100年史」[2]では，アマチュアリズムの問題は1920年代における主要な問題であり，多くのスペースを取り詳細な記述がなされている．しかし，この問題は決着されておらず，その後さまざまに形を変えながら，IOC の中で議論が続いてきた．しかし，1930年代に入ると1936年開催の第11回ベルリン大会および1940年の第12回東京大会という政治的な色彩を帯びたオリンピック大会をめぐって新たな問題[3]が起こり，国際的な議論が展開されたせいか，上記の「国際オリンピック委員会100年史」においても，1930年代の記述はベルリン大会および東京大会といったオリンピックと国際政治に関する諸問題に多くのスペースが費やされ，1930年代のアマチュアリズム問題の扱いは重要度が低くなっている．しかしながら，実際は，IOC と各競技連盟とのアマチュアリズムをめぐる議論は続いており，しかもこの問題は IOC にとっては非常に重要な，しかも解決の見通しがつかない難問であった．IOC にとって1930年代は，極めて困難な時代であり，それを代表するのが政治とオリンピックとの関係の問題，およびアマチュアリズムをめぐる問題，特にその中の FIS との論争とそこから派生する冬季大会の扱いに関する問題であった．

1930年代に展開したアマチュアリズムをめぐる IOC = FIS 抗争に関しては，いくつかの先行研究が存在する．マクドナルドは，IOC の議事録，IOC 会長バイエ＝ラトゥールと FIS 会長ニコライ・オストガードがやり取りした書簡を中心史料として，この抗争の過程を実証した[4]．また，イッテグレンは，当時 IOC 副会長であったジーグフリート・エドストロームに焦点を当て，彼の視点からこの論争を跡づけた．イッテグレンによれば，IOC の立場を主導したのはエドストロームであるとし，冬季オリンピック大会の開催に否定的だったエドストロームと冬季大会との関係の中で，IOC = FIS 抗争を考察した[5]．上述の「国際オリンピック委員会100年史」でも第１巻の第２章「バイエ＝ラトゥール会長の時代」において IOC = FIS 抗争は取り上げられているが，主要には第５節「アマチュア問題」において，1920年代から続くアマチュア問題の一環として論じられている．一方札幌冬季大会は，第７節「冬季オリンピック大会」において，シャモニー大会以降の初期冬季大会の歴史の中で触れられており，この IOC = FIS 抗争が札幌大会にどのような影響を及ぼしたのかという問題意識は薄い．

本研究は，札幌冬季オリンピック大会の視点から，この抗争を振り返ってみたい．具体的な対象期間は，問題が表面化した1935年の IOC オスロ総会から，冬季オリンピック大会からスキー競技の排除が決まった1938年の IOC カイロ総会までの３年間である．

本研究で扱うのは冬季オリンピック大会におけるスキー競技であり，この問題は冬季スポーツとその国際的な大会という固有の歴史や背景を持っているので，まず，そこから記述を始めてみたい．

２．冬季スポーツと冬季オリンピックのはじまり

スケートとスキーを中心とする冬季スポーツの国際競技会の開催は古い．アルント・クリューガーによれば，1870年代半ばには最初の人工スケート場がロンドンに出現し，1900年までにはパリの２つを含み，世界で10カ所のスケート場が利用されていたという．1879年のイギリス・スケート協会の結成に続き，1880年代にはオランダやドイツ，オーストリア，ハンガリー，スウェーデン等の国々でもスケート競技を統括する連盟が結成され，その連盟が主催する多くの競技会が開催されるようになった．主要な国際的な競技会も順次開かれるようになり，1888年に統合されたドイツ

＝オーストリア・スケート連盟が主催する最初のヨーロッパ選手権大会（フィギュア・スケートとスピード・スケート）が，1891年にハンブルグで，翌92年にはウィーンで開催された．また，1892年にイギリスで結成された国際スケート連盟が主催するスピード・スケートの世界選手権大会が1893年にアムステルダムで，フィギュア・スケートの世界選手権大会は，1896年にサンクト・ペテルブルグで挙行されている．アテネで開かれた第１回の近代オリンピック大会の開催が1896年であるので，それ以前にスケートは国際的な大会を実施していたのである[6]．このような背景から，スケート競技では，フィギュア・スケートが第４回ロンドン（1904年）および第７回アントワープ（1920年）の夏季大会で実施されている．アントワープでは，アイスホッケーも行われた．

一方，スキーは少し事情が異なる．現在のオリンピック大会で実施されるスキー競技は，ノルディックとアルペンの２つに分類されるが，競技としての成立はノルディック･スキーの方が早い．北欧を中心に各地で冬季の生活のための実用術としてさまざまなスキーが利用されていたが，それらは徐々にスポーツ競技として成立していった．ノルウェーでは，勇敢さを求めるジャンプと，幾分か短い距離のスキーを合わせたオールラウンドなスキー能力が賞賛され，スウェーデンやフィンランドでは，30～100kmという長距離の純粋な持久力を競う競技が好まれたという[7]．

19世紀末から20世紀初頭にかけて，北欧を中心として各都市でその街に適したスポーツを実施する「冬季スポーツ週間」が開催されるようになった．1892年から始まったクリスチャニア（現オスロ）におけるホルメンコーレンの「冬季スポーツ週間」は，その代表的なものである．実施される競技はジャンプ，クロスカントリー，ノルディック複合である．20世紀に入ると，ドイツやオーストリア，スイス等の中欧，ノルウェー，フィンランド，スウェーデン等の北欧の各国でスキー連盟が次々と誕生し，1910年には各国のスキー連盟を構成員とする「国際スキー・コミッション」が創設された．初代の議長はノルウェー・スキー協会会長のカール・ロールが就任し，各種スキー競技のルールの統一，競技会の開催，アマチュア資格等が議論された．「国際スキー･コミッション」が，1924年シャモニーにおけるFISの結成に繋がる．

ここで，もう一つ取り上げておかなければならないことは，「ノルディック競技会」に関してである．1901年にスウェーデンで始まった同競技会は，冬季オリンピック大会の開催に影響を与えたからである．ノルディック競技会は「スウェーデン・スポーツ促進中央協会」が主催する冬季スポーツの総合競技会であり，1901年の第１回大会から1926年の第７回大会まで続いた．競技会では，スキー（ジャンプ，クロスカントリー，ダウンヒル，複合），スケート（スピード・スケート，フィギュア･スケート），カーリング，アイス･ヨット，バンディ，キック・スレッジ，プルカレース（トナカイに引かせる橇競走）等である．開催地はストックホルムであり，雪不足の年にスキーだけをエステルスンドに移したことも二度あった[8]．

第２回大会は，国際スケート連盟主催の男子フィギュア・スケート世界選手権を，また第３回大会は男子およびペアの世界選手権を兼ねていたことからも分かるように，スウェーデン国内の限定した大会ではなく，外国からの参加者もあった．しかしながら，1909年の第３回大会で見ると，およそ2,000人の参加競技者の内，外国からの参加者は８ヶ国から32名となっており，ノルディック競技会は「スウェーデン人によるスウェーデンのための大会」であり，スポーツを通したスウェーデン人の統合，併せて国家威信の育成と他国への観光地ストックホルム宣伝が，その意図するところであった．ノルディック競技会は，単なる純粋なスポーツの競技会ではなく，ナショナリズムの色彩の濃い国家的イベントであった[9]．また，それと同時に，スケートの世界選手権，またヨーロッパ選手権大会がノルディック競技会と共同で開催されており，スピード・スケートとフィギュア・スケートの世界選手権大会の初期の歴史においては，ノルディック競技会を開催するストックホルムは，重要な場所だったのである[10]．

ノルディック競技会のリーダーシップを取ったのは，初期のスウェーデン･スポーツの指導者ヴィクトル・バルクである．少将まで昇任した職業軍

人であったバルクは，５名のIOC創設メンバーの一人であり，近代オリンピックの創始者クーベルタンとも親密だった．バルクは1921年までIOC委員を務めた．冬季スポーツをオリンピックに導入するという意見は，初期のIOC内に継続的に存在し，実際，1908年のロンドン大会と1920年のアントワープ大会ではスケート競技が採用されている．しかし，夏季大会から独立させて冬季大会を開催するということに対しては，バルクをはじめスウェーデン，ノルウェーといった北欧諸国は反対だった[11]．

しかし，1921年のオリンピック会議において，冬季オリンピックに関する重要な決議がなされた[12]．すなわち，「本会議はIOCに対して，次のことを勧告する．オリンピック大会が開催されるすべての国において，冬季スポーツ競技を組織化することが可能な国は，このような競技会をIOCの後援の下に開催し，また関係する国際スポーツ連盟のルールに従って実施されねばならない」とする決議であった[13]．スキーやスケート等の冬季スポーツが，欧米諸国に一定の広がりをもって浸透していき，さまざまな競技会も開催され，国民からの関心も高まってきたことの現れであろう．

1924年のオリンピック大会はパリで開催されることになっており，フランスのオリンピック委員会は，同国内のスキー選手権大会を開催していたシャモニーを会場に，「国際冬季スポーツ週間」として1924年１月25日から２月４日までの会期で，冬季スポーツの競技会を開催した．プログラムは，男子がフィギュア・スケート，スピード・スケート，アイスホッケー，スキー，カーリング，ボブスレーであり，女子はフィギュア・スケートのみであった．16ヶ国から258名の競技者が参加した．ノルウェーを中心とした北欧諸国が圧倒的な勝利を得た[14]．このシャモニーでの大会は大成功を収め，閉会式における挨拶で，クーベルタンはオリンピックの公式プログラムへの冬季スポーツの導入を熱心に語ったという[15]．

1925年プラハでのIOC総会において，冬季大会の実施が議決された．夏季大会の開催国内に開催権が優先的に与えられ，冬季大会の開催が不可能な国で夏季大会が開かれれば，他国に開催権が与えられるというものだった．さらに，翌1926年リスボンでの総会において，IOCは２年前のシャモニーの大会を遡及的に第１回冬季オリンピック大会とした．

一方，ノルディック競技会は衰退していく．1924年シャモニーの大会時に創設されたFISは，1926年から独自に世界選手権大会を開催し，また1928年にはバルクが死去，同年サンモリッツ開催の第２回冬季オリンピック大会の成功とも相まって，ノルディック競技会は徐々にその魅力を減じていった．1930年に第８回大会が計画されたがそれは実現せず，同競技会は1926年の第７回大会を最後に幕を閉じることになった．競技者たちもノルディック競技会に参加するよりも，FIS主催の世界選手権大会やオリンピック大会における勝利の方が魅力的となったのである．

３．冬季オリンピック大会候補地の国内決定とIOCオスロ総会（1935年２月）における問題提起

冬季オリンピック大会は，当初より，夏季大会の開催国で実施されることが決められており，その国での実施が困難な場合に限って他国で行われるということが，IOCで決定されていた．1928年開催の第２回冬季大会はスイスのサンモリッツで行われたが，これは夏季アムステルダム大会を開くオランダでは，スキー競技の実施が困難であったためである．以後，1932年のレークプラシッドとロサンゼルスのアメリカ，1936年のガルミッシュ－パルテンキルヘンとベルリンのドイツというように，同じ国で冬季と夏季の両大会が開かれている．それは，IOCの次のような規則からであった．

> 国際オリンピック委員会は，オリンピック冬季競技大会の挙行地を選定す．但し，オリンピアード競技保有国は其の国に於て冬季競技大会を全般的に挙行するが為めの十分なる保証を与え得る条件の下に優先権を留保す[16]．

1940年夏季大会の東京招致をにらみ冬季大会の開催地をどこにするか，その候補地については日本国内で多様な意見があった．また，主要な実施競技であるスキーとスケートを統括する全日本スキー連盟と大日本スケート競技連盟の見解も食い違い，そのために大日本体育協会を中心に冬季大会の選定を行うことになり，選定委員会が結成された．大日本体育協会，全日本スキー連盟および大日本スケート競技連盟の各役員から構成される委員会である．乗鞍，霧ヶ峰，志賀高原，菅平，日光，札幌が正式な候補地として予算措置を伴って挙がり，1936年２月から３月にかけて大日本体育協会およびスキーとスケートの両連盟からなる調査委員が，これら６ヵ所を現地調査した．３月18日の選定委員会において，その調査報告書を基に選定の議論を行い，最終的に開催地として札幌が決定された．スキー連盟は札幌を，スケート競技連盟は日光を推したが，日光はスキー競技の実施が困難なこと，役員や競技者等の宿泊施設が十分でないこと，交通の便が悪いこと，一方札幌は，スキーおよびスケートの競技会開催の実績があること，宿泊等に関しても十分なこと，東京からは離れるが，市中から競技会場への交通の便は問題ないこと等が札幌決定の要因だった[17]．

ところで，スキー指導者のアマチュア資格をめぐる問題がIOCにおいて初めて提起されたのは，1935年２月25日に開会されたIOCオスロ総会においてである．本来ならばIOCは，この総会で1940年夏季大会の開催地を決定するはずであったが，同大会の東京招致のために副島道正および杉村陽太郎の２名の日本人IOC委員によるイタリア首相ムソリーニ訪問が問題視され，開催地決定は次回総会まで延期されることになった．杉村は当時駐イタリア大使であり，首相ムソリーニとは日伊関係をめぐりしばしば協議しており，副島，杉村のムソリーニ訪問は，1940年大会の有力開催地ローマの立候補取り下げを懇願する訪問であった．総会においては，このことが政治的な「外部の介入」として問題となり，1940年夏季大会の開催地決定は，翌1936年７月のベルリン総会まで待たなければならなかった[18]．

スキー指導者に関してオスロ総会の議事録には次のように記されている．２月26日午後の会議での議論である．

> ファーンレイ氏（ノルウェー）は1932年のパリの第７回総会において国際スキー連盟決定のアマチュアリズムに関する決議を，国際オリンピック委員会に報告した．それは，国内的な大会ではプロフェッショナルと見なされる報酬を受け取るスキー指導者の国際的な大会出場資格に関する問題である．
>
> 国際オリンピック委員会は，会長より国際スキー連盟会長に注意を喚起するため，報酬を受け取るスキー指導者はアマチュアのために用意されているオリンピック大会には出場資格がないという事を，文書を以て申し送ることを決定した[19]．

IOCは報酬を受けてスキーを指導する者はアマチュアではないとし，オリンピックには参加できないと結論づけた．これを受け，IOC会長バイエ＝ラトゥールは，３月３日，FIS会長オストガード宛に，第４回冬季オリンピックのプログラムに関する議論の中で，FISの規定では国際競技会ではプロの競技者が参加できることになっているが，しかしIOCではオリンピックはプロの指導者は参加できないので，来年開催の冬季オリンピックには彼らは出場不可能である旨を，各国のスキー連盟に通知して欲しいとする文書を発送した[20]．３月19日，オストガードはFIS加盟の各国スキー連盟宛に，「スキーのプロの指導者はオリンピックのスキー競技に参加できないということに注意いただきたい」旨を各スキー連盟に伝えるようIOCより要請があったとの文書を送った[21]．

ところが，FISの理事会の議論を踏まえた４月27日付けのオストガードからバイエ＝ラトゥール宛の書簡には，いろいろな論点を含む内容が記されている．①３月３日の書簡でプロのスキー指導者はオリンピックに参加できないことを初めて知ったこと，②現行のFISのアマチュア規定は，1928年サンモリッツおよび1932年レークプラシッドの両オリンピック大会で適用されており，それ以降何ら変更ないこと，③1934年のFIS会議に

おいて，従来のFISアマチュア規定に基づき，1936年のガルミッシュ－パルテンキルヘン大会への参加について従来同様に参加決定したこと，④IOCのアマチュア規定が維持されるならば，FISは誤った前提の下に1936年大会への参加を決議したことになること，⑤IOCの規定が維持されればFISは大きな困難に直面することから，来年開催のガルミッシュ－パルテンキルヘン大会では，IOCの規定を変更して欲しいこと，⑥もし，当該規定の変更がなければ，次年の1936年大会には参加しないとする国が出てくる可能性があること，これらの点を述べながら，オストガードはIOCに対してアマチュア規定の検討を要望したのである[22]．

FISは1932年パリの会議で，指導を対価とする報酬を得るスキー指導者をアマチュアと見なし，彼らを国際的な大会に出場できるとする決定を行っていた[23]．それ以来，FISのアマチュア規定の変更はない．一方IOCのアマチュア規定は少し複雑である．「オリンピック競技大会開催ニ関スル一般規定」の第１条に，「各国際競技連盟ノ規定セルアマチュア規約ハオリンピック競技大会参加競技者ノ資格認定ニ之ヲ適用ス」とあり，各種の国際競技連盟のアマチュア規定がオリンピックにも適用されるのである．オリンピック競技のすべてを包括するようなIOCのアマチュア規定は存在しない．IOCはそれをめざしたが，各競技の多様な状況があり，オリンピック大会に参加する競技者の統一的なアマチュア規定は作ることができなかった．しかし，国際スポーツ連盟のアマチュア規定が適用されるといっても，第２条で，次の２点においてはその条件に適することが求められる．すなわち，「１．参加競技若ハ他ノ競技ニ於テ事情ヲ知リツヽ現ニプロフェッショナルタリ又ハ嘗テプロフェッショナルタリシ者．２．失ヒタル給料ノ補償トシテ支払ヲ受ケタル者．」[24]

IOCの規定で明文化されているアマチュアに関する文面は以上である．報酬を受け取るスポーツ指導者をアマチュアとは認めないとの記述はないが，報酬を伴うスポーツの指導者はアマチュアではないとのする考えは，1925年のIOC会議で確定されていたのである．

ところで，オリンピック大会に出場する競技者は，３つの署名が必要となる．競技者本人，競技者の国籍を有する国のNOC代表者の署名，同じく国籍を有する国の国内の競技連盟代表者の署名である．例えばスキー競技で出場するならば，本人，大日本体育協会代表者，全日本スキー連盟代表者である．アマチュア資格有りとする証明は，国際スキー連盟のアマチュア規定に則り，全日本スキー連盟が行うのである．

1936年の冬季大会におけるIOCの規定の変更をFISから要望されたが，IOCはこの要望に応えなかったことにより，結局のところ1936年ガルミッシュ－パルテンキルヘン大会では，プロのスキー指導者の参加は認められなかった．冬季大会終盤の1936年２月14日，FISはガルミッシュ－パルテンキルヘンでFISの第14回国際スキー会議を開き，次回の1940年冬季オリンピック大会への参加に関して次のような決議を行い，オリンピック大会本部として設置されたホテルのIOC宛に文書を送った．

> 国際スキー連盟は，本連盟における国際大会の規定が適用されることを条件に，1940年冬季オリンピック大会に参加する[25]．

因みに，1928年のサンモリッツ大会への参加の際に決議したFISの文面は，「競技は国際競技として扱われる．従って，国際スキー連盟の国際大会の規定に基づいて実施される．当該競技には，国際スキー連盟に加盟している各国のスキー連盟の登録者しか参加できない．国際スキー連盟のアマチュア規定は当該競技会に当てはまる」というものだった[26]．ここで問題となっているスキー競技者は，アルプスのスキー・リゾート地で，その地にやって来た観光客を相手に登山やスキーを教える山岳ガイドやスキー指導者たちである．彼らはオリンピックに参加できるかどうかという問題である．FISの規定によれば，スキーを指導することによって報酬を得るスキー指導者は国内の大会には出場できないが，FIS主催の世界アルペン・スキー選手権大会やオリンピック大会等の国際大会には出場できるというものであった．以後

FISは，このガルミッシュ－パルテンキルヘン会議での決議事項を頑なに固持していくことになる．

なぜ，冬季オリンピックが開催される１年前の1935年というこの時期に問題は起こったのか．それはノルディックとアルペンという２つのスキー競技の歴史から説明され得る．

スキー競技の歴史を見ると，アルペン・スキーはノルディック・スキーに比べて新しい．アルペン・スキーの競技化および組織化は，20世紀に入ってからである．その嚆矢はイギリス人のスキークラブであった．アルプス山中の寒村を観光地に変えたのはイギリス人である．19世紀の後半以降，リゾートや登山，トレッキング等のために観光地アルプスに多くのイギリス人がやってきた．冬季スポーツとしてのスキーをアルプスで開発したのもイギリス人である．1903年に創設されたイギリス人のスキークラブが，スイスでアルペンの競技会を開催したことが記録されている．アルペン・スキーの技術の確定，クラブの組織化，また競技会の開催や競技規則の制定等にリーダーシップをとったのが，1911年にスイス・ミューレンでカンダハル・スキークラブを創設したイギリス人アーノルド・ランである．当地のホテル経営者であるランは，スラロームとダウンヒルの競技会の開催に尽力し，アルプスにおけるスキークラブ間の競技会の開催を構想した．それは実現し，ミューレンとオーストリアのアールベルグ間で，毎年交互の競技会を開催した[27]．1924年に結成されたFISの第１回アルペン選手権大会（1931年）の開催地はミューレンであった．ランは，ノルディック・スキーを中心に北欧諸国がリーダーシップを持つFISの中に，アルペン・スキーの地位を高め，スイスやオーストリア等のスキー連盟と協力し，FIS内に中欧諸国の位置を占めることに大きく貢献した人物でもある．

初期の冬季オリンピック大会で行われたスキー競技は，ノルディック競技だった．第１回のシャモニーから第３回のソルトレークまで，アルペン・スキーは行われていない．1936年の第４回ガルミッシュ－パルテンキルヘン大会に初めてアルペン複合（回転と滑降）１種目が導入されたのである．

このことからも分かるように，アルプスのスキー・リゾート地でスキーを教えるスキー指導者が本格的にオリンピックに参加するのは，1936年の第４回大会からである．マクドナルドは，IOCの史料を調査した結果，1924年のFISの創設後10年間はIOCとの緊張関係は見られないと述べている[28]．ジャンプやクロスカントリーを主とするノルディック競技では，アマチュア資格をめぐる問題は生じなかったのである．ところが，1930年代を迎えてアルペン・スキーがスイスやオーストリアを中心とする中欧諸国において急速に広がり，多くの観光客がスキーをするためにアルプスの山岳リゾート地にやって来るようになると，リゾート地では熟練のスキーヤーが指導者として雇用されるようになり，問題が生じてきたのである．このようにプロのスキー指導者の出現と彼らのオリンピック出場の問題は，スイスやオーストリアの中欧諸国に起因した問題であった[29]．

４．IOCベルリン総会（1936年７月）における東京開催の決定とスケート問題の生起

1936年２月のガルミッシュ－パルテンキルヘン大会終了後，IOC会長バイエ＝ラトゥールは，アメリカ周りで訪日の旅に出発した．1940年夏季大会の東京招致をめざしていた東京市が招待したのである．３月19日に横浜に着いた会長は，約２ヶ月間日本に滞在し，日本のIOC委員，大日本体育協会等のスポーツ関係者との協議，競技場や各種スポーツ施設の見学と競技者との懇談，天皇への謁見，奈良・京都，日光等への観光を行った．東京招致にとってもっとも重要な協議会が，３月24日の大日本体育協会主催の午餐会後に行われた．５項目にわたる論点で協議されたが，その中の一つが冬季大会についてであった．

バイエ＝ラトゥールはまず，日本側が冬季大会の開催を望んでいるかを確認し，大島又彦大日本体育協会会長は札幌での開催を希望すると答えた．その上で，ジャンプやボブスレー等の競技施設の設備をはじめ冬季大会には多額の費用がかかること，参加競技者の割に観客が少ないこと，冬

季大会に関心を示す国は数カ国に過ぎないこと等を説明し，現在 IOC と FIS 間でアマチュア資格をめぐって議論があり，合意に達しなければオリンピック大会からスキー競技は排除される可能性があり，現在のところその可能性は高いことが明言された．さらに，もしそうなれば，冬季大会を開くこと自体意味がなくなり，夏季大会中に人工スケート場でスケート競技を実施することも考えられるとの見解を示した[30]．

1936年７月の IOC ベルリン総会において，1940年夏季大会の開催は東京と決まったが，冬季大会の開催地決定は延期された．スキー競技をめぐる FIS との合意がなされていないためである．冬季大会の開催地決定は，翌1937年ワルシャワで開催の IOC 総会においてである．このベルリン総会で IOC は再度，報酬を受け取るスキー指導者のオリンピック参加を認めないとする決定を再確認した．これを受け，バイエ＝ラトゥールは，８月３日，オストガードに宛て FIS のアマチュア規定の変更がなければ，スキー競技をオリンピック・プログラムに含めることはできないと通知した[31]．すぐにオストガードから，「ガルミッシュ－パルテンキルヘンでの満場一致の決議が最終的なものなので，現在の状況では，次期冬季オリンピックに参加することは難しいと思います．･･･それは，次期大会が日本で開催となれば，アマチュアリズムの問題だけでなく長距離移動の問題もあるからです」とする返信があった[32]．

このベルリン総会前後から，冬季オリンピック大会をめぐって IOC は新たな問題を抱え込むことになった．冬季大会の実施競技の中で，スキーと並ぶもう一つの柱であるスケート競技を統括する ISU（国際スケート競技連盟）から，もし1940年大会が日本で開催されるならば，ISU の参加は困難であるとの態度表明があったからである．

この問題は1936年６月11日，ISU 会長のウルリッヒ・サルコウからバイエ＝ラトゥール宛の書簡から始まる．サルコウは ISU 理事会で２回にわたって議論した結果，まだ正式決定ではないとしながらも，「1940年の大会が日本で開催されるならば，ISU はスケート競技には参加しない」ことが確認されたと記し，オリンピックのスケート競技の実施に関して，IOC は ISU を当てにしないで欲しいと書き添えた[33]．スケート・シーズンは短く，遠隔地日本への往復は時間的にも金銭的にも余裕がないとする理由からである．これに対し，バイエ＝ラトゥールは，８月４日付けの書簡で，スケート・シーズンが損なわれるということが理解できないこと，ISU に加盟している国でのオリンピック大会に反対することに驚いている旨を書き送った[34]．これら両書簡は，極めて短い簡単な内容が記されているのみであり，詳細な論争はその後何回かのやり取りの中で明らかにされる．交わされた論争をまとめてみると，次のように言える．

ISU 側の見解は，①スケート・シーズンの短さからくる困難．ヨーロッパ諸国の競技者の日本派遣には，日本への移動，大会前の練習と調整，大会，帰国のための移動等を考えれば10週間は必要であり，スケート・シーズンを従来の１月の数週間と２月の最後の週までと考えると，世界選手権大会，ヨーロッパ選手権大会の開催が不可能になることである．②金銭的に困難．ほとんどの競技者が職業について働いており，これらアマチュア競技者にとって，長期の休暇取得は金銭的に困難であること．③日本は遠隔地であるということ．日本は1936年のドイツで開催の第４回冬季大会に参加し，他に参加した17ヶ国と競技したが，次は17ヶ国が日本へ行けという IOC の要求は，過度な要求であること．④オリンピックよりも IUS 主催の大会の方が意義ありとする主張．オリンピック開催以前の1880年代末から実施してきた大会の方が，ISU にとっては重要であること．⑤ IOC を構成する委員の中で，冬季スポーツに関心を寄せる委員は少ないこと．冬季大会に競技者を派遣していない国（トルコ，インド，アルゼンチン，ペルー等）が冬季大会に関して決定することは妥当でないこと[35]．

サルコウは，1937年１月19日付けのバイエ＝ラトゥール宛の書簡の最後で，「冬季スポーツ国がもっとも相応しいと思える場所で冬季オリンピックが開催されるよう，そのための手配と説明がなされるよう，私は心から望みます．また，冬季スポーツには何も関係ない代表者や諸国によって採

用されたよそよそしい非現実的な決議を，私たちが受け入れざるを得ないことのないよう，私は切に望みます」と書いた[36]．スウェーデン人であり，フィギュア・スケート競技の初期の時代にすばらしい競技実績を残した会長サルコウにとってみれば，冬季スポーツについて何も知らない多くの委員によって構成されるIOCが勝手に決めたことに従わざるを得ない状況に，不満を漏らしたのである．

このように，1940年の冬季大会に関して，中心競技となるスキーとスケートを統括するFISおよびISUとの関係から極めて困難な事態が引き起こされた．バイエ＝ラトゥールは，サルコウの見解がISU会長個人のものか，あるいは連盟を代表する見解かの調査を，ノルウェーのIOC委員トーマス・ファーンレイに依頼した．1937年1月16日に，サルコウの書簡とそれに対する自らの書簡と添付して，ISU連盟へのノルウェー代表者であり，また同連盟の理事でもあるゲルハルト・カールセンへの接触を求めたのである[37]．併せてこの書簡を，フィンランドやドイツ，オーストリア，オランダ等の関係国のIOC委員にも発送している．すぐにファーンレイより返信があり，カールセンによれば，サルコウの発言はすべて理事会で承認された事に基づく発言とのことであった[38]．また，フィンランドのIOC委員クロギウスからも，同国のヤコブソンと接触した内容の返信があった．書簡からはヤコブソンの役職は不明だが，文面からはISU理事だと思われる．ヤコブソンによれば，ISU理事会はすでに，1940年大会のヨーロッパ以外での開催ならば，それには参加しないことを決めており，1937年夏の会議で正式に決定されるとのことである．国際的な競技連盟の中で，ISUが最も古く歴史ある連盟であり，自分たちにとっては，世界選手権とヨーロッパ選手権がもっとも重要な大会なのであり，他の大会のために自ら主催する大会が影響を被ることは考えられないと，ヤコブソンは断言したという．サルコウ，ヤコブソンの両者を長年よく知っているクロギウスは,「この問題に関しては，サルコウ氏よりもヤコブソン氏の方が非常に頑固であり，厄介だと思います」[39]と，IOC会長に報告した．

スウェーデン人のIOC副会長ジーグフリド・エドストロームは強硬な意見を主張した．彼は同国人サルコウの人物評として，「トラブルを引き起こすことに喜びを感じる協調性を欠く人」とし，また，オストガードと面会したが，FISの主張を繰り返すだけだったと述べ，IOC理事会に冬季スポーツの各競技連盟会長を出席させる構想に対して否定的な見解を示した．そして，バイエ＝ラトゥールに対して，「われわれはスキー関係者に，もし彼らが譲歩しないならば，スキー競技がオリンピック・プログラムから排除されるということをはっきりと伝えなければなりません．実際，われわれは冬季スポーツすべてを中止にした方が良いのではないでしょうか」と提言したのである[40]．

1937年3月29日，サルコウは副島に対して，ISUが抱く感情を代弁する書簡を送っている．そこで彼は，スケート・シーズンが短い中で，アマチュア競技者や役員，審判員に日本への移動と大会のために，およそ2ヶ月間を犠牲にすることはあまりにも過大すぎると述べる．というのも，大会に参加するほとんどの者が職業に就いており，「その間の補償がない」ためであること．さらに,「スケートの競技者たちは，国を代表してオリンピック大会で競技することに，それほどアイデンティティを感じていない」ことを挙げている．そして，この年の6月にサンモリッツである会議で議論することになると伝えた[41]．

しかし一転，ISUの参加問題はその後問題とはならなかった．．サルコウが言及した1937年6月28日にサンモリッツで開会のISU総会において，サルコウ会長の「次回オリンピック不出場」決議は採択されず，また会長および副会長の更迭もなされ，オリンピックに対する姿勢も一変したのである．このことから，ヨーロッパ以外の地で冬季オリンピック大会が開催されれば，ISUは参加しないとの方針は取り下げられたのである[42]．

5．FISシャモニー理事会（1937年2月）とIOCワルシャワ総会（1937年6月）

IOCはFISとの関係を何とか打開したかった．1937年6月開催のIOCワルシャワ総会で1940年

冬季大会の開催地を決定しなければならず，その前にFISとの問題の解決の糸口をつかみたかった．1937年１月25日には，バイエ＝ラトゥールは13名のIOC委員に宛て書簡を送った．13名のIOC委員の国のFIS理事たちが２月11－12日にシャモニーで開催のFIS理事会に向けて出発する前に接触をし，５月末までの間にFISの臨時総会を開催するように依頼して欲しいというものである[43]．FISの規程によれば，構成国の過半数の賛意があれば臨時総会を開催できるので，総会を開催し，そこでスキー指導者問題の解決を図り，それを受けてIOCワルシャワ総会に臨むというバイエ＝ラトゥールの構想である．

この構想の背景には，スキー指導者の参加を認めないIOCの姿勢が変わらない限り，FISはオリンピック大会に参加しないとする会長オストガードに不満を有するFIS構成国もあり，またドイツの動きに関する情報があった．ファーンレイはバイエ＝ラトゥール宛に，ドイツ・スキー連盟がFISのアマチュア規定の改正案を用意しており，FIS規程に従って臨時総会の開催に漕ぎつけ，従来のアマチュア規定を変更するために準備していること，またこれらの動きには，ドイツのスポーツ指導者チャムマー・ウント・オステンの強力な後押しがあり，臨時総会の開催地としてベルリンが準備されていること，さらに，スカンジナビア３ヶ国のスキー連盟の会議で，FISのアマチュア規定の変更を他国から提案されれば，それに賛意を示すとの情報があったこと等を伝えている[44]．さらには，ノルウェー・スキー連盟の新会長との懇談で，新会長はFISのアマチュア規定変更に賛成であり，ドイツ連盟が提案すれば，スカンジナビア３ヶ国はそれに賛成することは確実との情報も，ファーンレイより伝えられた[45]．

FISの規程によれば，1936年２月のガルミッシュ－パルテンキルヘン総会における決議「国際スキー連盟は，本連盟における国際大会の規定が適用されることを条件に，1940年冬季オリンピック大会に参加する」を変更する権限をもつのは，総会における議決のみである．次の定例総会は1938年２月にヘルシンキで予定されていた．そこで，理事会に席をもつドイツ・スキー連盟は1937年２月に開催のシャモニー理事会で臨時総会開催の承認を取り，ベルリンで開かれる臨時総会でアマチュア規定の変更を目論んでいたのである[46]．

日本のスキー関係者も，独自に事態の打開に動いた．理事会出席の資格をもっていない日本だったが，全日本スキー連盟は在欧の津田正夫（ジュネーブ）と高橋次郎（ベルリン）をシャモニーに派遣し，ロビー活動を行い，オリンピック大会でのスキー競技の実施を訴えた．その結果，理事会の中で日本側の意思を表明する機会を特別に与えられた．しかし，討議を傍聴することはできなかった．両者は，「FIS委員会のアマチュア問題をめぐる対IOCの態度は極めて強硬」[47]と報告している．

前年のガルミッシュ－パルテンキルヘン総会では，出席した日本の代表者は決議案に賛成しており，その結果としての満場一致の決議案採択だったため，１年後にそれを覆そうとする行為は合理性を欠いていた．またドイツからの臨時総会開催の提案も否決された．津田等は全日本スキー連盟に対して，1938年２月フィンランド開催の定期総会において決着をつけるための予備的工作の重要性を訴えた．ワルシャワ総会前に解決への見通しをつけたかったバイエ＝ラトゥールの目論見は失敗したのである[48]．

1937年のIOCワルシャワ総会は，６月７日に開会された．冬季オリンピックに関する議論は９日午後の会議であった．口火を切ったのは，エドストロームである．彼は総会前に強硬な姿勢を示していた．アマチュア資格をめぐる問題を，FISが1938年のヘルシンキ総会まで先送りしたことを踏まえ，エドストロームは総会前に，「われわれはそれまで待つことはできません．現況においては，冬季大会は完全に排除する方向に，私の気持ちは傾いています」とする書簡を，バイエ＝ラトゥール宛に送っていた[49]．総会で彼はラディカルな提案をする．「多くの冬季スポーツにはオリンピック精神に背反するところ多く，冬季大会の継続に関し，ある決断が必要ではないか」と述べた．「ある決断」とは，冬季オリンピック大会の中止である．副島はすぐに，冬季大会を開催する予定で準備に取りかかっている日本にとって，仮

にIOCが冬季大会の取り止めを決定すれば，非常に残念なことだと発言した[50]．その後，エドストロームは冬季オリンピック大会の取り止めを動議として提出し，賛否の投票が行われた．26対1の票数でエドストロームの動議は否決された．その後，1940年冬季大会は現行の出場競技者の資格規定に従い，全競技で開催することが決まり，直ちに開催地の議論に入った．

まず，ノルウェーのファーンレイがオスロの開催希望を表明した．この表明の根拠として出したのが，前年IOCベルリン総会における嘉納治五郎の発言である．1940年夏季大会の東京招致を希望する発言の中で，嘉納は，夏季大会が東京に決まれば冬季大会の日本での開催を放棄すると発言したのである[51]．しかし，この根拠は認められず，夏季大会を開催する国で冬季大会が十全に実施できればその国に優先的な開催権があるとする原則に則り，札幌が決まったのである．しかし，条件付きの札幌開催決定であった．その条件とは，「札幌が第5回冬季オリンピックをSuccessfulにする事がカイロの会議までに見透しが付けば札幌にやらせる．Waveするならノルウェーがやる事」[52]と稲田が記したように，翌年の1938年3月にあるIOCカイロ総会において札幌大会の準備が進んでいたらそのまま札幌で行い，準備が進んでいなければオスロで行うというものであった．札幌にしてみれば，いかにIOCが満足できる準備ができるかが大きな課題であった．この総会では東京大会の準備状況が議論されたが，各委員はその準備の遅れに懸念を持ち，また冬季スポーツの国際大会の開催経験が少ないこともあり，本当に日本がオリンピック大会を開催するための準備ができるのかどうかという不安が，IOC内には存在していたのである．

この議論の中で，ファーンレイは，ノルウェーのように冬季スポーツが盛んではあるが，夏季オリンピック大会を組織するには困難な国は冬季大会の開催が難しいと述べ，夏季大会開催国が有する冬季開催の優先権の廃止を訴え，オリンピック競技会憲章の改定を提案した[53]．この提案は認められ，翌1938年のIOCカイロ総会で，夏季大会と冬季大会はそれぞれ独立して開催地が決定されることになるのである．

この総会に出席したIOC委員副島道正を補佐するためにワルシャワに入った全日本スキー連盟の前会長稲田昌植は，日本の主張に賛意を示し札幌開催を支持する委員の中にも，日本に冬季大会の開催の準備はできるのか，その能力はあるのかという不安の念が見られたことを報告している[54]．副島も次年の1938年3月カイロでのIOC総会で，組織委員会会長ならびに事務局長が出席し，大会開催にどれほどの熱意をもって取り組んでいるのか，どれだけ大会の準備ができているのか，具体的に報告することの重要性を指摘している．「若しカイロ会議に対し，我国が冷淡なるに於ては，東京取消説，札幌譲歩論の再燃することなきを保し難し．否燎乎として火を睹るが如しと云ふも敢て過言にあらざるべし」と報告している[55]．このワルシャワ総会では，東京大会の準備状況を副島は報告したが，主競技場の選定をはじめ各競技場が確定されていないこと等，準備の遅れが指摘され，組織委員会の熱意や能力まで問題になったのである．東京に加え，札幌の準備が始まるので，財源的な問題を含め，日本での未経験な冬季競技の開催に不安を持つIOC委員がいたのである．

さらにこの総会では，IOCのアマチュア規定に関する改訂があった．上記の3章で示した「オリンピック競技大会開催ニ関スル一般規定」の第2条で記されたアマチュアとは認められず，オリンピックには参加できないとする2つの条件に加えて，新たに3つ目の条件が追加されたのである．以下がその内容である．

> 3．体育あるいはスポーツにおいて指導することにより報酬を受ける教師，ただし，教師としての彼らの通常の職務の中に，それが主要な業務ではないという条件で体育やスポーツの初級的な指導が含まれる教師は，この規定から除かれる[56]．

小学校等の初等レベルの学校等の教師や指導者はアマチュアであり，中等レベル以上の学校等での体育やスポーツを専科で指導する教師や指導者はプロとみなすということである．この改訂で，

指導を対価に報酬を得るスキー指導者のオリンピック参加はできないとするIOCの姿勢はいっそう強固になった．

ともあれ，1940年の冬季オリンピック大会は札幌で開催されることが決まった．しかし，１年後のIOCカイロ総会において，IOCの各委員が納得できる準備状況を報告しなければならない課題を課されたのである．

６．FISヘルシンキ総会（1938年２月）とIOCカイロ総会（1938年３月）

スイスのミューレンを本拠地に，アルペン・スキーを確立，その発展に尽力したイギリス人アーノルド・ランは，1937年12月３日に同国のIOC委員クラレンス・アバデアに宛て，FISの立場ならびに自らの見解を説明する長い書簡を送っている．内容は広範にわたるが，ポイントをまとめれば次のようになろう．①IOCの多くの委員は冬季オリンピック大会には関心を寄せていないこと，またスキー競技について十分な知識と伝統を理解している委員がほとんどいないこと，②1928年と1932年の過去２回のオリンピック大会にスキー指導者が出場し，その時には何も問題視されなかったこと，③賞金のために競技をしたり，競技会に参加することでお金を受け取る競技者の排除に，今までFISは取り組み，そのような競技会の撲滅に成功したこと，④スキー指導者はプロの指導者かもしれないが，プロの競技者ではないこと，また，IOCが定めている「ブロークン・タイム・ペイメント」の禁止は，現実に照らせば合理的ではないこと，⑤スポーツ大会には，国際的あるいは全国的，また地域限定の多様な競技会があり，スキー競技も同様であり，それぞれの競技会への出場資格が異なるのは妥当なこと，⑥現在の国際スポーツの状況は，その勝利が国家威信のバロメーターになっており，またオリンピックの勝利が，現今のヨーロッパにおける戦争の兆候となるイデオロギー論争に何らかの関連性を示している現況下，国家からトレーニングの環境が保証されているスキー以外何もしなくてもよいスキー専門家は，プロのスキー指導者が排除されるなら同様に排除されるべきこと，⑦オリンピック問題がスキー界に介入してくるまでは，FISは現実とうまく調和しながらスキー競技の普及・発展に貢献してきたし，国家間の競争とういう状況の中，政治に汚染されることからスキー競技を守ってきたのは，熱意をもった各国のスキー関係者の尽力のおかげであること，⑧シャモニーでのドイツの動議について，それが否決されたのは，ドイツの指導的なスキー関係者がFISの改定を望まなかったことと，ドイツからの動議が政治領域の日独協定のスキー界版と見なされていたことであり，このことは公然の秘密であること[57]．

国家によるスポーツへの介入やステート・アマへの批判は，この書簡では名指しはしていないがドイツに向けられたものであり，ランは，1936年の冬季および夏季の両オリンピック大会を批判的なまなざしで見ていることが推察される．この書簡には，そのドイツと手を組んで，IOCが自らの立場をFISに押しつけている事に対する反発が見られる．アメリカのスキー競技の先駆者であり，ニューヨーク・スキークラブの創始者であるローランド・パルメドは，アメリカ・オリンピック委員会会長のアベリー・ブランデージ宛の書簡で，ランについて，「私見では，この問題解決に対する最大の障壁はアーノルド･ランの存在です．彼はFISへのイギリスの代表者であり，優秀で精力的な男です．国際スキー界の中心人物です」[58]と書き送っている．

FIS会長オストガードは，FISのアマチュア規定を変更するというIOCの要請に対して頑なに拒んだ．1937年10月21日付けのオストガード宛の書簡でバイエ＝ラトゥールは，IOCはFISのアマチュアの定義やその規定を批判しているのではなく，各種スポーツの国際競技連盟の中にも，報酬を受け取っている人をアマチュアとみなしたり，プロだった人をアマチュアとする，あるいは他の競技でプロだった人をアマチュアとして認めている連盟もあるとし，このような競技者にはオリンピック参加資格がないだけであり，FISも他の連盟と同様にIOCとの関係を築いて欲しいと求めた[59]．これに対し，オストガードは，IOCによるFIS規定への批判だとは思っていないし，

IOCがオリンピック出場資格規定を決定することは尊重する．だが，それ以上に自分はFIS規定を尊重すると述べ，両規定が相容れなければオリンピック参加を諦めざるを得ないだけであり，「そうなっても，FISが失うものはほんの僅かです．スキー競技がオリンピックに加わった日から，FISや関係連盟の内部に軋轢が生じたと感じておりました」と，バイエ＝ラトゥールに返答した[60]．

1938年2月のFIS総会が，札幌大会でスキー競技を実施するのかどうかを決める山場である．エドストロームは総会前の2月15日に，総会でFISのアマチュア規定の継続が認められなければ会長辞任の意向を，オストガードが各国のスキー連盟に発表したとの情報をバイエ＝ラトゥールに伝え，IOCの提案が受け入れられなければ，①スキーのない，FISの参加しないスキー競技なしの冬季大会を開催するか，②冬季大会そのものを中止するかの2つの選択肢があると提案している[61]．IOCの意向はドイツのスキー連盟が提案する手はずであった．FISの国際競技規定第4条を，「オリンピック冬季競技参加のためにはIOCのアマチュア規定を通用する」と補足する提案内容である．

日本からもFIS総会出席のために，全日本スキー連盟副会長の大野精七，前年のシャモニーで開かれたFIS理事会に出席した津田正夫と高橋次郎の3名がヘルシンキを訪れることになった．総会前，大野はドイツを中心に，FIS総会への情勢分析，日本側の意向を示し関係者の協力を仰いだ．その後，ベルギーへ赴きバイエ＝ラトゥールを訪問し，もしドイツの提案が受け入れられなければ，参加しうる国だけでもスキー競技を実施したいとの希望を伝えた．この希望に対して，IOC会長は「日本は充分外交工作が必要とする」旨を言われた．総会前の感触を大野は，「日本にては冬季競技に対し楽観し居る様に候得共，欧州に来り候處面倒ならんとの悲観説可なりに有之候」と書いた[62]．

総会の議事の経緯については，総会に出席した高橋の「第十五回国際スキー連盟定期総会報告」に詳しい．2月21日に始まった総会の2日目の午後に1940年冬季オリンピック参加問題は議論された．ドイツの提案を認めるかどうかの議論である．2年前にガルミッシュ－パルテンキルヘン総会での決議を修正するのかどうかでもあった．高橋の報告では議論を通して論点をあぶり出し，解決策の合意を得ていくというものではなく，イギリス代表のランが発言したように，論点はすでに論じ尽くされているので，提案を承認するのかしないのかの判断の問題である．提案賛成，反対の意見が出席者から述べられたあとで，口頭での決が取られた．ドイツ提案に賛成が6票（ドイツ，フィンランド，ハンガリー，イタリア，日本，スウェーデン），反対が9票（オーストリア，エストニア，フランス，イギリス，ノルウェー，ポーランド，スイス，チェッコ，ユーゴスラビア）である．この結果，FISの1940年の冬季オリンピック参加は，IOCがFISのアマチュア規定を受け入れない限り見送られることになったのである[63]．

その後の議論は，1940年のFISの世界選手権大会の開催地の選定に移った．申し込んでいる国は，イタリア，ノルウェー，日本である．議論の中で，札幌でオリンピック大会が開催されるので，その前後に他の国際的な競技会を開くことをIOCは許さないとの会長の発言もあったが，最終的にはIOCカイロ総会後に，開催地選定はFIS理事会に全権を委ねることになった．このように，ドイツの提案にかけたIOCは，FISに敗れたのである．

IOCはFIS総会の1ヶ月後にカイロで1938年の総会を開催した．この総会は日本にとって非常に重要な総会となった．東京大会の準備状況を報告すること，そして冬季オリンピック大会をどう判断するのかが問われた．IOC委員嘉納治五郎と東京大会の組織委員会事務総長の永井松三，随員として総勢7名が両氏をサポートした．1937年7月に勃発した盧溝橋事件を契機に日中間は戦争状態に突入しており，交戦国におけるオリンピック大会について厳しい目で見られており，また主競技場問題，会期の変更，万国博覧会との関係等，準備状況に関してIOC委員を納得させることが難しかった．一方冬季大会では，FISの決議を受け，冒頭で示したようにスキー競技を排除した冬季オリンピック大会を札幌で開催することになっ

たのである．

６．おわりに

日本側はスキー競技を何とか札幌冬季オリンピック大会で行いたかった．IOC カイロ総会後，そのための任をもって，稲田昌植は FIS 加盟国の関係者，IOC 委員を歴訪するために1938年５月に横浜から出航した．アメリカを経由し，ドイツに滞在，そこからスイス，イタリア，ハンガリーを経てドイツに戻った．そのドイツ滞在中に，東京大会および札幌大会の中止の報を受け，稲田は道半ばで帰国することになった[64]．

1938年７月15日に日本政府は，1940年の夏季および冬季の両オリンピック大会の中止を決定し，大会組織委員会に大会返上の勧告を行った．組織委員会は翌16日に総会を開き，政府の勧告を受け入れ，IOC に大会返上を通達した．IOC はその後，夏季大会をヘルシンキに，冬季大会をサンモリッツに移した．しかし，冬季大会のスキー競技を公式競技ではなく，デモンストレーション競技として位置づけた IOC に対して，スイス・スキー連盟は反発し，1939年６月の IOC ロンドン総会において，冬季大会の開催地として1936年の開催地ガルミッシュ－パルテンキルヘンが選定された．また，総会では1944年オリンピック大会の開催地が決まった．夏季大会がロンドン，冬季大会がイタリアのコルチナ・ダンペッツオである．

しかし，結局のところ，1939年９月に始まった第二次世界大戦の影響で，1940年および1944年のそれぞれの両大会は開催されなかったのである．再びオリンピック大会が復活するのは，1948年の冬季サンモリッツ大会および夏季ロンドン大会である．

本研究は以下のようにまとめられる．

IOC（国際オリンピック委員会）は，1938年３月にカイロで開催の年次総会において，1940年開催の札幌冬季オリンピックからのスキー競技の排除を決定した．なぜ，IOC はこのような決定を行ったのか．本研究の目的は，この経緯を明らかにすることである．

１．1940年冬季オリンピック大会の開催地として札幌市が決定されたのは，1937年の IOC ワルシャワ総会である．しかし，それ以前に，FIS（国際スキー連盟）と ISU（国際スケート連盟）は，IOC と冬季オリンピックの開催について議論していた．論点については，FIS はアマチュア資格，ISU は遠隔地日本での開催をめぐってである．

２．議論が収束しなかったのは，アマチュア資格をめぐる IOC と FIS との論争である．指導の対価として報酬を受け取るスキー指導者は，オリンピックに出場できるかどうかという問題である．この論争は1935年から1938年まで続いたが決着できず，IOC は冬季大会からスキー競技を外したのである．

３．IOC カイロ総会では，1940年の夏季東京オリンピックを含め，日中戦争下における日本でのオリンピック大会開催につき疑義が生じたが，夏季東京及び冬季札幌の両大会の開催は承認された．しかし，1938年７月15日の閣議でオリンピックの中止が決まり，両大会は幻に終わったのである．

（注）

１）*Official Bulletin of the International Olympic Committee*, July 1938, No.37, p.24.

２）*International Olympic Committee-One Hundred Years, The Idea-The Presidents-The Achievements*, Vol. 1-3, IOC, 1994.

３）ベルリン大会ではドイツのユダヤ人競技者の差別，排除の問題，またオリンピックがナチ・ドイツによって政治的に利用されるのではないかという問題が起こり，欧米の多くの国でボイコット運動が起こった．東京大会では，交戦国において大会が開催されることに対する疑念が生じ，ボイコットの動きが見られた．東京の場合は，開催の２年前に大会返上となったので，アメリカを中心にヨーロッパの国々で起こった反ベルリン大会のボイコット運動に比べれば，反東京大会のボイコット運動の国際的な広がりは少なかった．

４）Gordon MacDonald, Going Downhill: Relations between the IOC and Fédération Internationale

de Ski in the late 1930s, *Fifth International Symposium for Olympic Research*, 2000, pp.105-112.

5）Leif Yttergren, "Cancel the Winter Olympics!" Edstrom, the Winter Olympics and the Skiing Teacher Conflict, *Journal of Olympic History*, Vol.13, No.3（November 2005）, pp.48-58.

6）Arnt Krüger, The History of the Olympic Winter Games, the invention of a tradition, in Matti Goksoyr, Gerd von der Lippe, Kristen Mo（eds.）*Winter Games Warm Traditions, －Selected papers from the 2. International ISHPES seminar*, Lillehammer 1944, The Norwegian Society of Sports History, 1996, p.103.

7）*Ibid*. p.106.

8）Ron Edgeworth, The Nordic Games and the Origins of the Olympic Winter Games, *Citius, Altius, Fortius*, Vol.2, No.2（November 1994）, pp.29-37.

9）*Ibid*.

10）*Ibid*.

11）*Ibid*.

12）IOCは毎年１回，IOC委員による年次総会（Session）を開催している．またこれとは別に，IOC，NOC，各種スポーツの国際競技連盟を構成員とするオリンピック会議(Congress）を開催している．この会議の開催は不定期であり，1920-30年代においては，1921年ローザンヌ，1925年プラハ，1930年ベルリンの３回の開催である．

13）Roland Renson, The Cool Games: The Winter Olympics, 1924-2002, in Larry Gerlach（Ed.）, *The Winter Olympics: From Chamonix to Salt Lake City*, The Univ. of Utah Press, 2004, p.44.

14）Ron Edgeworth, The Nordic Games and the Origins of the Olympic Winter Games.

15）Roland Renson, The Cool Games: The Winter Olympics, 1924-2002, p.46.

16）「オリンピック競技会憲章」の根本規則第６条の記述．「オリンピック大会関係諸規則」第十二回オリンピック東京大会組織委員会，1937年，p.1.

17）永井松三編「報告書 第十二回オリンピック東京大会組織委員会」p.377-378．札幌選定の詳細な経緯については，小川勝次「日本スキー発達史」朋文堂，1956年，p.190-193を参照．

18）副島，杉村のムソリーニ訪問およびIOCオスロ総会については，拙稿「IOC会長バイエ＝ラトゥールから見た東京オリンピック」坂上康博・高岡裕之編著『幻の東京オリンピックとその時代 ― 戦時期のスポーツ・都市・身体 ―』青弓社，2009年，p.26-30を参照．

19）*Official Bulletin of the International Olympic Committee*, May, 1935, p.9.

20）1935年３月3日付けバイエ＝ラトゥールからオストガード宛書簡，IOCオリンピック研究センター所蔵史料，以下はIOCアーカイブズと表記．

21）1935年３月19日付けオストガードから各国スキー連盟宛文書，IOCアーカイブズ．

22）1935年４月27日付けオストガードからバイエ＝ラトゥール宛書簡，IOCアーカイブズ．

23）*International Olympic Committee-One Hundred Years, The Idea-The Presidents-The Achievements*, Vol.1, p.241.

24）「オリンピック競技大会開催ニ関スル一般規定」『オリンピック大会関係諸規則』第十二回オリンピック東京大会組織委員会, 1937年, p.12-13.

25）1936年２月15日付けオストガードよりIOC宛書簡，IOCアーカイブズ．

26）同上

27）Arnt Krüger, The History of the Olympic Winter Games, the invention of a tradition, p.111.

28）Gordon MacDonald, Going Downhill: Relations between the IOC and Fédération Internationale de Ski in the late 1930s.

29）イッテグレンは，1930年代初頭の頃の北欧のアルペン・スキーは，小さなスポーツであり，実施する人も少なく，スポーツ競技として行っ

ている人はもっと少なかったし，スウェーデンにおいてアルペン・スキーの全国的な大会がエステルスンドで開催されたのは，やっと1937年であったと述べている．Leif Yttergren, “Cancel the Winter Olympics!” Edstrom, the Winter Olympics and the Skiing Teacher Conflict.

30）「バイエ＝ラトゥール伯との協議会概要（東京会館，1936年３月24日）」東京YMCA名誉主事ラッセル・ダーギン作成の文書, IOCアーカイブズ.

31）1936年８月３日付けバイエ＝ラトゥールからオストガード宛書簡，IOCアーカイブズ.

32）1936年８月14日付けオストガードからバイエ＝ラトゥール宛書簡，IOCアーカイブズ.

33）1936年６月11日付けウルリッヒ・サルコウからバイエ＝ラトゥール宛の書簡，IOCアーカイブズ.

34）1936年８月４日付けバイエ＝ラトゥールからサルコウ宛書簡，IOCアーカイブズ.

35）1936年12月24日付けサルコウよりバイエ＝ラトゥール宛書簡，および1937年１月19日付けサルコウよりバイエ＝ラトゥール宛書簡，IOCアーカイブズ.

36）1937年１月19日付けサルコウよりバイエ＝ラトゥール宛書簡，IOCアーカイブズ.

37）1937年１月16日付けバイエ＝ラトゥールよりファーンレイ宛書簡，IOCアーカイブズ.

38）1937年１月22日付けファーンレイよりバイエ＝ラトゥール宛書簡，IOCアーカイブズ.

39）1937年１月25日付けクロギウスよりバイエ＝ラトゥール宛書簡，IOCアーカイブズ.

40）1937年１月22日付けエドストロームよりバイエ＝ラトゥール宛書簡, エドストローム文書, Vol. 282，スウェーデン公文書館.

41）1937年３月29日付けサルコウより副島道正宛書簡，IOCアーカイブズ.

42）小川勝次「札幌大会を獲得する迄」『スキー年報』No.11，1937年12月．このISUのサンモリッツ総会で何が起こったかについては不明な点が多い．日本代表として，稲田昌植，高橋次郎，津田正夫，李想白の４名がこの国際スケート競技連盟の総会に出席している．彼らはワルシャワ総会後にサンモリッツに移動し，総会に出席したのである．稲田は全日本スキー連盟の前の会長であり，高橋は小樽商科大学の教員であり，当時ドイツに留学中であった．また，高橋はスキーの競技者であり，1936年のオリンピック大会時には全日本スキー連盟の調査員としてガルミッシュ－パルテンキルヘンに派遣された．津田は在ジュネーブの外交官，李は大日本バスケットボール協会創立メンバーの一人であり，当協会会長である副島IOC委員の随員としてIOCワルシャワ総会に出席したのである．このようにスケート関係者は誰もいない．この総会について小川は「国際スケート連盟が，会長サルコー氏の主唱による同連盟委員会の『次回オリンピック不出場』決議を採択せしめず，更に会長，副会長を更迭せしめる事に成功，国際スケート連盟創設以来の大改革を断行せしめたのであった」と簡単に触れているが，後のFISヘルシンキ総会へのIOCとドイツ，さらには日本の関係を考えると，IOC，ドイツ，日本を中心としたISU内のクーデターを計画した上での，４名の参加ではなかったのかと推察される．

43）1937年１月25日付けバイエ＝ラトゥールより各国IOC委員宛書簡，IOCアーカイブズ.

44）1936年12月31日付けファーンレイよりバイエ＝ラトゥール宛書簡，IOCアーカイブズ.

45）1937年１月22日付けファーンレイよりバイエ＝ラトゥール宛書簡，IOCアーカイブズ.

46）IOCとの関係は不明だが，1940年大会の最終開催地の決定がガルミッシュ－パルテンキルヘンであったこと，1936年のガルミッシュ－パルテンキルヘンで開催の冬季オリンピック大会の組織委員会会長であり，ドイツのIOC委員リッター・フォン・ハルトとバイエ＝ラトゥールおよびエドストロームとの親密な関係から推察すると，IOCによるドイツ側への要請があったとも推測される．

47）津田正夫，高橋次郎「シャモニーFIS委員会の報告」『スキー年報』No.11，1937年.

48）シャモニー理事会の議事概要は，1937年４月22日付けのFIS通達第２号に記されている．それによれば1940年冬季オリンピック大会については議題その４で議論され，次のように記述されている．

「1940年冬季オリンピックへの参加の可能性について，細かな議論がおこなわれた．臨時スキー会議を1937年春に招集しようというドイツ・スキー連盟の提案は，否決された．この他，この問題の決議を1938年２月末にヘルシンキで開催される通常会議でおこなうことが決定された．

国際スキー連盟の理事会は，1936年にガルミッシュ－パルテンキルヘンで開催されたスキー会議で採択された次の決議を再確認した．

『国際スキー連盟のルールが適用されなければ，国際スキー連盟は1940年の冬季オリンピックに参加しない.』」「FIS通達第２号」1937年，IOCアーカイブズ．

49）1937年４月16日付けエドストロームよりバイエ＝ラトゥール宛書簡，エドストローム文書，Vol.282，スウェーデン公文書館．

50）*Official Bulletin of the International Olympic Committee*, October 1937, No.35, p.6.

51）稲田昌植「ワルソー会議を中心としたる冬季競技獲得運動経過に関する報告書」『スキー年報』No.11，1937年．なお，ファーンレイは３月18日付けのバイエ＝ラトゥール宛の書簡で，ベルリン総会の議事録には，嘉納の発言の記録はないとしても，「1940年のオリンピック大会開催地の投票が行われようとする直前に，嘉納博士は立ち上がり，もし東京で1940年の大会が挙行されるならば，日本は冬季大会の開催に関する権利を放棄しようと述べたことは，事実です．冬季大会の問題はここでは議論せず，この問題はワルシャワ総会まで延期ですと述べることによって，あなたは嘉納を制止しました．その後すぐに，嘉納氏は着席しました．当然にも，私は，嘉納氏の発言は冬季大会開催の断念と同等であると思いました」と書き送っている．1937年３月18日付けファーンレイよりバイエ＝ラトゥール宛書簡，IOCアーカイブズ．

52）稲田昌植「ワルソー会議報告：冬季競技が札幌と決定する迄の経緯」『オリンピック』第15巻第９号，1937年．

53）*Official Bulletin of the International Olympic Committee*, October 1937, No.35, p.7.

54）稲田昌植「ワルソー会議に列席して」『スキー年報』No.11，1937年

55）副島道正「報告書」永井松三編『第十二回オリンピック東京大会組織委員会報告書』p.104.

56）*Official Bulletin of the International Olympic Committee, October* 1937，No.35，p.7.

57）1937年12月３日付けアーノルド・ランよりクラレンス・アバデア宛書簡，IOCアーカイブズ．

58）1937年11月22日付けパルメドよりブランデージ宛書簡，ブランデージ・コレクションBox. 13，LA84財団．

59）1937年10月21日付けバイエ＝ラトゥールよりオストガード宛書簡，IOCアーカイブズ．

60）1938年２月７日付けオストガードよりバイエ＝ラトゥール宛書簡，IOCアーカイブズ．

61）1938年２月15日付けエドストロームよりバイエ＝ラトゥール宛書簡，エドストローム文書，Vol.289，Riksarkivet.

62）大野精七「スキー会議を前にして」『オリンピック』第16巻第３号，1938年．

63）高橋次郎「第十五回国際スキー連盟定期総会報告」『スキー年報』No.12，1938年12月．

64）稲田昌植「欧米に使して」『スキー年報』Vol. 12，1938年12月．

Tragedy of the 1940 Sapporo Winter Olympics: Victim of the Feud between the IOC and FIS

NAKAMURA　Tetsuo

In March 1935, during its annual session in Cairo, the International Olympic Committee (IOC) decided to exclude skiing events from the 1940 Winter Olympics in Sapporo. In this paper, I examine how this decision was made.

1. During the 1937 IOC session in Warsaw, Sapporo was selected as the site for the 1940 Winter Olympics. However, before this decision was finalized, the Fédération Internationale de Ski (FIS) and the International Skating Union (ISU) had been disputing details of the upcoming Winter Olympics with the IOC. The FIS's complaints included discussion of amateurism, and for its part, the ISU took issue with holding the Olympics in the remote venue of Japan.

2. The resolution of the conflict was hindered by disagreement between the IOC and FIS on whether people who received compensation for their work as ski instructors should be allowed to compete in the Olympics. This controversy continued from 1935 to 1938 without reaching a conclusion, leading the IOC to simply remove all skiing events from the Winter Olympics.

3. At the IOC session in Cairo, concerns were raised about holding the Olympics in Japan (including the 1940 Tokyo Summer Olympics) while it was embroiled in the Sino-Japanese incident. Nonetheless, both the Tokyo Summer Olympics and Sapporo Winter Olympics were approved. However, they would never be take place because the Olympics were suspended by the cabinet on July 15, 1938.

Keywords : 1940 Sapporo Winter Olympics, International Olympic Committee,
Fédération Internationale de Ski, amateurism